豚の島・極楽島の幼稚園

福西百合

〝豚の島〟とキャプテンクックに言われた島、しかし今では極楽島とまでも言われている島。それがニュージーランドです。

オーストラリア大陸の右にあたかもオーストラリアの一部の如くついている島々。百年余の歴史しかないこの国では今でも野生の豚や鹿が多く、猟好きな人々を楽しませていることから、クックが豚の島と称したこともうなずけます。

日本よりやや狭い面積に、人口わずか二百五十万人、人間の実に少ない国です。広々とした原野、波うつような緑の丘でのんびりと草をはむ羊・牛の群は、四季を通じいたるところで見られ、今では羊牛の島と言う方がふさわしいような気もします。

この国と日本を比較した時に感ずる相違の大きな原因は、日本の四十分の一しか人間が住んでいないという事にもとづいています。農業国ではあってもこの方法は近代的であり日本の農村地方から受ける印象とはかなり違うものです。

ここで見学した幼稚園・保育園・学校・特殊学校・社会福祉施設などを、日本のそれらと比較することは、ある意味では困難なことです。生活程度が高く、福祉園と称される国であるために、それらの施設は実によく整っていました。

〈幼稚園訪問〉

緑の芝生で楽しそうに遊ぶ子ども達の声をたよりに幼稚園にたどりつきました。門の外側は、五、六台の三輪車の駐車場になっていました。ほとんどの家庭が自家用車を持っていることが子どもにさえも、歩くことよりも乗ることの習慣をつけているのではないかと思えました。

広い芝生には点々と遊具が置いてありました。

自動車――これは子どもたちの最も好きな遊具の一つです。三十年位前の型の車ですが、子どもたちは運転しているようなつもりであちこちを動かします。この自動車は子どもの親からの寄附とのことです。

ヨット――ほとんど穴らしい穴はみあた

らないし、きれいにペンキが塗ってあるこのヨットには子どもが十五人位乗れます。帆もはってあり海に乗り出してもよさそうなものです。そのヨットでは子どもの船長さんはじめ、皆役目をもった子ども達が忙しそうに動いています。

大きな木箱——日本の母親たちから「トゲがささりはしまいか。古い釘が出ているんじゃないかしら。洋服がよごれて困る。」などなどの苦情の出そうなごく普通の荷造りに使う木の箱です。子どもたちにとっては、夢の家であったり、洞窟であったり、汽車であったり、それらを利用してピチピチ動いています。（ある幼稚園で、箱の内側にみなれた文字が書いてあるので、よく見たら日本語で、板の質と大きさを書いたものでした。箱の外側には、メイドインジャパン MADE IN JAPAN と書いてありました。多分日本から機械でも輸入した時に使われた箱でしょう。）

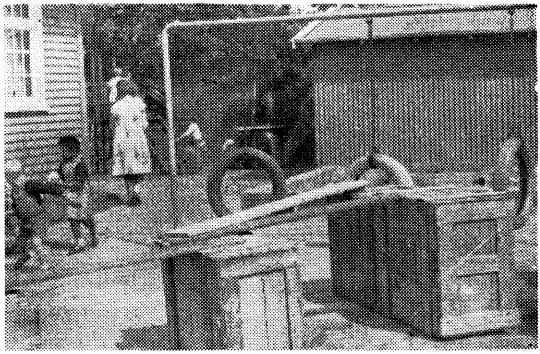
水遊び用水槽——約一・五米四方の大きさ、深さ約五十センチの水槽、水は半分位入っています。台の上に置き、子どもに適する高さにしてあります。空缶・空ビンその他が水の中に入れてあります。子どもは水遊び用のエプロンをして楽しんでいます。

すべり台——坂を利用して作られたものや、すべり台の下を室外遊具の倉庫に作ってあるものなどが、興味をひきましたが、他はほとんど変りありません。

砂場——砂のぬれている時には使わないように、金網の被いをつけてある所が多いです。砂にまみれて遊ぶ子ども達、洋服がよごれたら洗えばいいやという具合です。

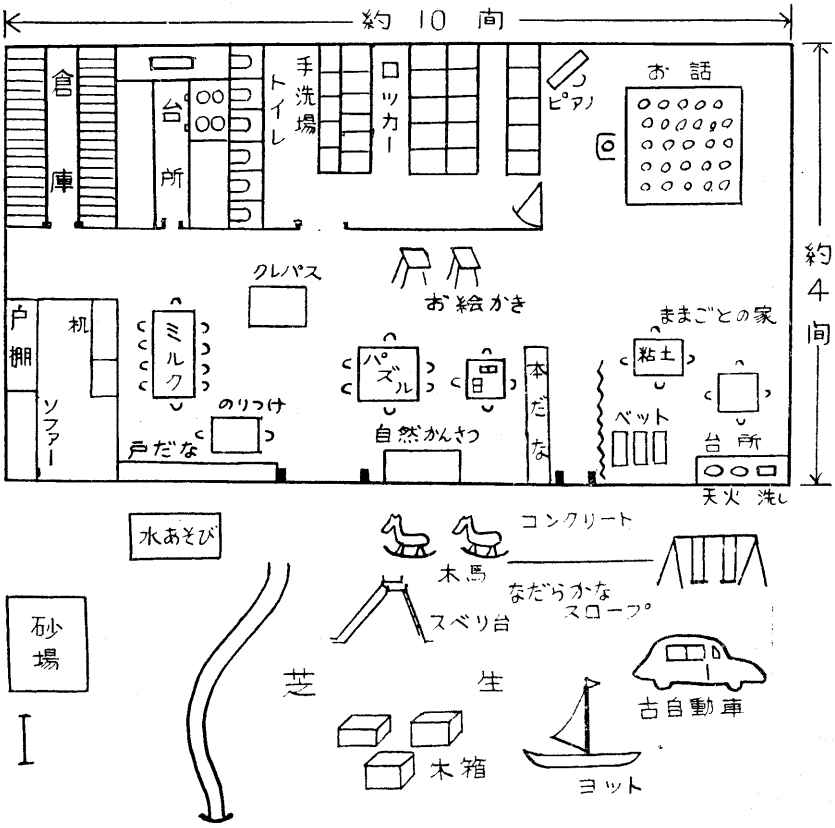
ブランコ——殆んどの幼稚園のものが、古いタイヤを利用したブランコです。見ていると木のものよりもすわりやすいらしいです。その他小さな木製の自動車・パイプの遊具などは、日本のものとほとんど同じです。

さて、室内に目を向けてみましょう。保育室は文部省の原案にもとづいて設計されてある為に、ほとんどの幼稚園のものが、かなり類似しています。日本の幼稚園でお遊戯室として使われているくらいの、普通の保育室の倍位の大きさの部屋です。その広い部屋に、絵本の机・ままごとの道具の机・色つきのドーフ粘土の机・古雑誌とのりの机・クレパスと画用紙の机・楽器の机・はめ絵の机・大工道具の机・自然観察の為の机・画架・積木・古電話・お家ごっこの道具などなどが配置されています。した



がって子どもは自分の遊びたい遊具を使い、したいことをして遊べばよいわけです。朝子どもが幼稚園に来てから帰るまで、全体が集まって行なう活動はほとんどなく、すべてが子どもの意志によってそれぞれの活動を進めてゆき、先生はその助言者という形です。したがって子どもは自主的に行動せざるを得ないというわけです。それらのいくつかをのぞいてみましょう。

お家ごっこ——普通の家庭と同じように居間・台所・食堂・寝室・風呂などがあります。台所用具は皆子ども用の大きさですが実物と同じように作られています。ドーフ粘土を使いケーキの型を作り、天火に入れて焼き、それらを食器にもって食べ、お茶を入れたりします。食べ終ったら食器を洗い戸だなにしまうという家庭でしていることをそのまま行ないます。寝室にはベットがならべてあり、お人形をそのベットにねせます。時々シーツをとりかえたりするのも、ありのままです。お風呂は、人形用のですが、タオル・石鹸は実物ですから、



赤ちゃんを洗ってあげるような具合にできるわけです。

お絵かき——画架は六人分位はありますから、いつでもしたい時に使えます。粉絵の具にのりを入れて少し濃くしたものを用い、新聞紙大の大きさの紙に描きます。材料は豊富ですから、一日に三枚も描く子もあるほどです。筆を使う絵からはじまるこの国の子どもの絵は、のびのびとして大胆です。

楽器——既製の楽器よりも、教師や実習生が作った楽器を多く使います。太鼓やタンブリンなどは独特の音を出します。

教員室は周囲三方がガラスですので、教師がそこで仕事をしていても、子ども達の遊びに目がとどくわけです。ロッカー室とトイレはほとんど同じ部屋にあります。ほとんどの幼稚園のトイレにはドアがつけてありません。それらの部屋も教師の目の高さの所はガラスで見通しがつくようになっています。

モーニングティーはどこの幼稚園でも見られることです。十時前後になると一つの机にミルクが運ばれて来ます。酪農国である為にミルクは豊富で、一人が二合ずつのみます。幼稚園によってはりんごや梨の果物も食べさせます。また自分の家からお菓子を持って来る子もあります。子どもたちは遊びの途中で、ミルクをのみたくなったら来ます。約十人位が机をかこんで、お菓子を食べたりミルクをのんだりします。全部が終るまでに約三十分位かかります。その間教師もお茶をのんだり、お菓子を食べたりします。子ども達に目をくばりつつ食べますから、結局立ち食いはもちろんのこと、歩きつつ食べます。日本だったら、お行儀が悪いと批難される行動でしょう。

お話の時間は、子どもが帰るすぐ前にあります。子ども向きの絵本を先生が子どもに読んでやります。子ども達は床の上にむしろのようなものをしいてすわります。畳の上にすわる習慣の日本では、多分こんな時に椅子を使って腰かけるだろうと思うと妙な気がしました。

八幼稚園の組織

この国の幼稚園は、公立と私立に分けられます。公立のものは幼稚園協会（Free Kindergarten Union）に属するもので、文部省のもとに管轄されています。各都市に幼稚園協会の支部がありその都市の全幼稚園の経営にあたります。ほとんどの幼稚園が公立ですが、日本の私立幼稚園協会の組織またそれに属する幼稚園に似ています。私立のものは、児童福祉事務所のもとに管轄されていて、日本の保育所にかなり似ています。園舎・遊具・教師養成などあらゆる面で両者には大きな差があります。ここでは公立のものを主にとりあげます。

園舎ができるまで　自分達の家の近くに幼稚園を作りたいと希望する母親が幼稚園協会と連絡をはかり、種々の方法で募金をはじめます。幼稚園の建物の費用の三分の一が集まった時文部省に要請を出しますと、政府から費用の三分の二の援助金が出ます。また設計案は文部省作成の基準にそ

って作られます。

遊具の購入　建物に付属するいくつかの遊具は、政府から三分の二の援助金が出ますが、ほとんどの遊具は幼稚園協会が中心になり、募金をし購入したり、父兄に寄付を依頼して準備をします。ほとんどの幼稚園は十年以下の歴史のみですが、それらはこの経路で建てられました。

入園申し込み　子どもが二歳半位になると、近所の幼稚園に申し込みます。いつでも欠員ができれば入園できます。この国では、小学校の制度が、日本とは違い、満五歳になるとその日にでも手続きをして入学できるようになっています。したがって毎日が入学式であるとも言えるわけです。また子どもの能力に応じて次々に進級することもできます。

保育時間　四歳児中心の午前のクラスと三歳児中心の午後のクラスがあります。午前のクラスは、月曜から金曜まで週五回で、九時から十一時半まで。午後のクラスは週二回で、一時から三時半までです。

園児数・教師数　幼稚園の定員は、すべての園で一定で、午前・午後のクラスとも各四十名です。それに対して、教師は免許を持つ者二名が保育にあたります。一方が主任であり、経験一年以上の者で、保育運営はじめその園の責任をもちます。他方は助手として働きます。また子どもの母親が交代でお手伝いに来て、モーニングティーの時の世話、掃除、部屋の整備などの雑用をします。これを通して母親の幼稚園に対する興味を増し、また幼稚園での子どもの行動を観察する機会にもなり、有意義な結果が多いようです。

保育料　公立は無料ということになっていますが、材料費はじめその他雑費を毎週寄付のようにして集めます。平均園児一人当り月一ポンド（日本円で約千円）です。

教師養成　ニュージーランド幼稚園協会 New Zealand Free Kindergarten Union のもとに二年期間の幼稚園教員養成所があります。講義と実習を平行して行ないますが、授業課目は、教育・心理・発達・幼稚園経営法はじめ、文部省の六領域としてあげられてあるものとほとんど同じ内容のものなどです。授業料はもちろん無料で、年額二百六十ポンド～二百二十ポンド（月額日本円で約二万円）の給費が幼稚園協会から全学生にあります。給費額の差は、能力と年令によるものです。

教師の給料　免許状の種類、教育歴、経験、能力により差がありますが、主任年額七百七十五ポンド～四百五十ポンド（月額日本円で六万円～三万七千円）、助手年額五百七十ポンド～三百九十ポンド（月額約四万七千円～三万二千円）で、日本の教師に比較すると大きな差があります。

おわりに

ニュージーランドのいくつかの幼稚園を見学してそれらをまとめました。日本との違いをはっきりと説明しきれない点が多いと思いますが、概要をつかんでいただければ幸いです。

＊　＊　＊